

占い

アイヌ民族は自然からの恩恵をよりどころとして生活してきましたから、自然界に存在する万物を神として尊重し、あらゆる



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

キカムイの頭骨を上座から炉端に下ろしてきて、懸案事項についてどうしたらよいかを人に聞こえないような声で密かに祈願します。キツネの

手段を講じて自然から情報を集め、自然の恵みを得、または危険を回避してきました。例えば、人間にはない能力をもつ動物の頭骨は、脳みそなどの中身を全部だしたあと、中に削り掛けを詰めて、外側もそれで飾り、自らの守護神（憑神、守り神）として屋内の上座に安置し、春と秋の大祭には削り掛けを新調しお祀りしていました。他人に見せず個人で秘かに祀るこれらの守護神はシラッキカムイ（si-本当に ratki-ぶら下がる kamuy-神様）などと呼びます。キツネのような陸の生き物はキムンシラッキ（kimun-山手の siratki-シラッキカムイの略）、アホウドリやウミガメなどの海の生き物はレプンシラッキ（repun-沖合の siratki-同前）と呼び分けられています。

しかし、捕獲した生き物すべてを同様に扱ったわけではありません。ほかの個体とは違う毛や羽の色だったり、捕獲者の感性でこれと思った獲物は、自分を護ってくれるために自ら自分の手に掛かってくれたと考えて、早速に自分や家族の守護神となってもらうことを祈願しました。すると、その獲物の神が夢に現れて、守り神となるために捕えられたのだと告げることもあったそうです。ただし、神様が役に立ってくれるか否かは、人々の生活がかかっているのです、その守護能力も厳しく評価されます。シラッキカムイも祀り手に対する貢献度が低いとみなされると、神は元の世界に帰りたいのだろうと解釈されて、神の国へ送り返されてしまいます。

このシラッキカムイは、人間がものごとの判断に困った時など、神様にご託宣をいただくために祈願する神様でもありました。この占いを、コニウオク（ko-で niwok-占う）と言いますが、男性の場合には、シラ

神様なら頭骨の下あご部分はずして、占う人の頭に乗せ、自身の主観が入らないように精神統一したうえで頭を下げ、その骨が落ちた状態で占いました。どの方向に向くか、或いは表に向くか裏に向くかなど落ちた状況で吉凶が判断できるように、事前に自らが取り決めておいて占うのですが、落ちた結果に納得がいかなければ、再度同じ方法で占うこともありました。一方、女性の場合はキツネなどの動物を捕獲して自ら祀ることはできなかったため、代わりにお椀で占ったそうです。例えば、夫の浮気が疑われるような場合は、目の前では占えないので、食料を保管するため女性が管理する蔵の中で占ったりしていました。また、猟の腕が良いといわれる人でも、さらに猟運に恵まれるように、猟に行く大まかな方角や、川上か川下か、または川の右岸か左岸かなど、具体的なその日の猟場について占うこともありました。もし、その占いが当たれば、感謝の祈りと併せて、供物や新たに削り掛けなどを作って神様に捧げ感謝しました。祀っているシラッキカムイも、一人1神とは限らず、多い人では5神も6神もお祀りしている人もいました。旅をする際に、ケトウシ（ketus-莫塵製の鞆）という旅行用のかばんにシラッキカムイを忍ばせて同行してもらったといっています。

アイヌの人々の占いは、現代の感覚では風変りに感じられますが、何もかも自然頼みの生活では、超自然的な力に頼るのも無理からぬことだったといえます。いくら科学が進歩しても、人間が明日のこともわからないことには変わりなく、結局は神頼みということで、^{おひだ} 夥しい人が新年に神社、仏閣に押し寄せるのとそう違いはないのではないのでしょうか。



*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏 (1940-2025) 元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごほん』（監修、デーリマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。